

編集後記

社会科学年報第二三号は、ご覧のように社研グループ研究助成をうけていた「明治国家史の研究」(一九八四年度発足、代表隅野隆徳所員・法学部)による特集と所員諸氏からの応募論文、および平井・大西両所員の著書に対する書評論文で構成されています。編集は松浦、赤羽、私(大谷)の三人で担当しましたが、私は実際には特集部分の編集・執筆に関係しただけですから、この特集部分について気になったことを述べてみたいと思います。

明治国家史研究会の発足時点で、法学部所属のベテランの所員から、かつて社研で行われた共同研究「日本近代化の研究」についての説明があり、昔の社研月報が資料として配布されました。これを聞いた時、昔の共同研究構想の雄大なことに感心すると同時に、正直言って八〇年代にそのような問題意識でやられてはかなわんなあ、そんな会なら参加するのやめよかと真剣に悩んだものでした。ところが実際に参加してみると、案ずるよりなんとかで、気楽な会で安心してました。しかし、考えてみると、「明治国家云々」なる標題を冠した研究会が、「気楽」というのもおかしいものです。

この理由を私なりに考えてみました。一つには研究会のメンバーが法学部所属の所員とその知人で、年数回は外部の講師をお呼びしましたが、基本的には内輪の会で、法学部以外の社研所員の参加がなかったためでしょう。しかし、これは逆に言えば明治憲法に規定された国家と社会を歴史的なパースペクティブで検討しようという研究会の基本姿勢が、現在の研究者仲間の興味を引かなかった、極端な言い方をすればテーマ自体の衝撃力が弱くなっていることのあらわれのようには思います。勿論研究会は真面目に定期的に行われ、特集号には力作が寄せられたのですが、やはり以上のような疑念は拭えません。

現代日本の、それも東京の街で昨年の秋以来進行している奇怪な現象を、神田校舎の窓から見ていると、まだまだ「明治国家」の呪縛にとらわれている部分があるようです。歴史的分析の方法の必要性もゼロではないと考えます。研究所でも、現状分析・理論化という作業と同時に、それと歴史的分析との橋渡しを考えるようなことがあってもいいのではないかと愚考しますが、いかがでしょうか。

おかしな編集後記となり申し訳ありません。末筆ですが、編集にご協力いただきました執筆者諸氏、事務担当者、出版社の方々からお礼申し上げます。

(大谷正記)